

学 位 論 文 題 名

日本期の南サハリンにおける建設活動に関する研究

学位論文内容の要旨

本論文は、サハリン島の北緯50度旧国境以南における1905(明治38)年から1945(昭和20)年8月までの建設活動について総体的に論じるものである。対象期間において同地域には40万人以上の日本人が居住し、林業・水産業・鉱業を軸に日本と密接に関連した産業・経済システムが形成されていたにもかかわらず、近代日本の海外植民地の建築史研究の上で最も研究の遅れている地域であった。そのため、本論文は海外植民地における建設活動に関する歴史的研究の大きな欠落を補うばかりでなく、北海道とサハリンとの建設活動における影響を明らかにし、現存する歴史的建造物の歴史的評価を明らかにすることを目的とした。本論文では、統治期の建設活動をその性格から初期・中期・後期の3期に分け、これを第1部・第2部・第3部でそれぞれ論考し、これに統治危険地区の時間的変遷を俯瞰した第4部を加えて4部構成とした。

【第1部】第1部では、統治最初期(1905-11)の市街地形成・官衙建築活動を中心に言及した。統治期以前の低開発状態と戦災から、統治初期において利用できる既存市街地は存在しなかったため、最初期にはコルサコフ(大泊)・ウラジミロフカ(豊原)の2市街地の建設が経営の中心となった。この時、市街地を含む土地区画基準は方300間を基本区画とした明治期北海道の土地区画基準を踏襲し、両市街地間に鉄道を敷設することが拓殖経営の根幹にあった。初期の官衙建築は、樺太守備隊・樺太民政署・樺太庁によって豊原新市街地を中心に進められ、陸軍技師兼任樺太庁技師田村鎮(1878-1942)がその統括にあっていた。これらの工事を請負ったのは北海道の建設業者伊藤亀太郎(1863-1944)であり、施工には伊藤の代理人田中銀次郎(1868-1937)と、下請業者遠藤米七(1875-1935)が当たった。初期官衙は木造の洋風建築が多く、ロシアの建築様式を用いず、外観意匠にステイックスタイルを用いるのが特徴である。工事を手がけた遠藤は、「樺太の遠藤」と呼ばれる代表的な建設業者・実業家となった。

【第2部】統治中期(1913-1928)は製紙産業施設・鉄道敷設・港湾建設などが建設活動の中心となり、拓殖活動が南サハリン全域に急速に拡大した時期である。大正3(1914)年の三井紙料工場(王子製紙大泊工場)の操業後、第一次世界大戦による欧州からのパルプ供給途絶により、サハリン・パルプの重要性は飛躍的に向上し、豊原、落合、泊居、真岡、野田、恵須取、知取、敷香にパルプ・製紙工場が次々と建設された。これらの工場は鉄道・炭鉱・港湾・市街地などを必要としたため、恵須取・知取・敷香など特に後期に建設された工場施設は、各地の新興拠点市街地の成立と発展につながり、全島規模での社会資本整備と拓殖活動の進捗に大きく貢献した。また防火構造として鉄筋コンクリート造を採用する嚆矢となった。反面、社宅建築は東京本社で設計されたためか、総じて木造平家、真壁堅羽目下見板張という仕様で建設され、縁側や紙張障子などを有する和風色の強い住宅建築で防寒性に乏しく、暖房設備の点でも「満洲」などに対して後塵を拝している。

中期には中央山地を縦断する鉄道豊真線や「樺太の玄関」大泊築港など「樺太拓殖の象徴」となる大土木事業が進められたことを特筆すべきである。また鉄道関連建築技術者の

大半が札幌鉄道局などで活動していることも注目される。中期以降の建設業界と建設業者について言及した。中期以降の建設業者は、北海道・東北・北陸を中心とした東日本全域から渡航し多くが北海道での建設工事を経験後サハリンへ渡航していること、渡航年齢が20-30代の者がほとんどであること、活動地域が大泊→西海岸→敷香・恵須取と新興市街地の建設に伴い、業者の移動が認められること、建設業専業よりも造材業を兼ねた営業形態をとる者が多く、その意味で「請負業者」と称すべきことなどを論じた。

【第3部】第3部は統治後期(1929-45)の樺太庁建築活動を論の中心とした。樺太庁の建築組織は昭和4(1929)年の技師石井佐賀恵(?-1975)の赴任を皮切りとして急速にその陣容を整え、貝塚良雄(1900-74)・林幹太郎(1903-?)・栄米治(1904-76)など新しい技術者と札幌工業学校新卒生を中心とする若手建築技術者により新たに編成された。また、昭和4-6年にかけて豊原郵便局、樺太庁豊原医院、樺太庁中央試験所など一挙に大規模官衙建築の新築改築を実施した。これは樺太庁でははじめての鉄筋コンクリート造建築であり、従来は見られなかったモダニズム、クラシカル、インターナショナルスタイルなど本邦の建築様式を強く意識したデザインが展開されている点が注目される。技術者の中では後に技師に昇進する貝塚良雄について特筆される。彼は神奈川工業学校出身の中堅建築技術者であったが、すぐれたデザイン感覚を有し、樺太庁中央試験所本館・樺太庁博物館など統治期全体を代表する建築の設計監理を手がけた。また栄米治は東京美術学校を卒業後樺太庁に入庁し、大泊警察署・樺太拓殖共進会施設・樺太庁師範学校などの設計・監理に従事、昭和16年に退官後北海道電力(株)に勤務、建築課長として北海道各地の発電所・変電所・支社社屋を手がけ、退職後独立し栄米治建築設計事務所を開設、学校・病院・住宅など道内各地で数多くの建築を設計するなど、戦後の北海道を代表する建築家の一人として成長した。栄米治の戦後の経歴に関しては多くの研究の余地を残しているが、樺太庁時代の活動は彼の修業時代と位置づけて理解すべきであろう。貝塚や栄を補佐したのは、札幌工業学校・仙台高等工業の新卒技術者たちであり、彼らの多くは戦後栄の紹介で北海道電力の技術者となり、あるいは北海道の民間建設業者として活動した。

【第4部】第4部では公共建築・商店・まちなみなど古写真による比較検討を中心に統治期建築の特色と変遷を論じた。南サハリンには良質な採石地を持たず、煉瓦工場も遠藤煉瓦工場のみであったため、組積造が発達せず、大正後期から木骨鉄網コンクリート造が庁舎建築や一部の店舗に使われ始め、鉄筋コンクリート造は工場施設、大規模庁舎、銀行建築など施工の難しさからかその普及はごく一部にとどまり、全般に木造の比率が非常に高かった。その他、樺太庁の庁舎建築(支庁、林務署、郵便局など)に標準設計例がしばしば認められること、町役場庁舎に秀作が認められるほか、大正期の商店の多くが明治後期の北海道で発達したいわゆる洋風町家建築を踏襲していること、後期以降の商店建築も北海道のそれと軌を一にして発展していることなどが注目される。

最後に、本論文では南サハリンの建設活動が土地区画制度・建設業者・建築技術者・商店建築などの点において北海道と密接な関係を持ち、戦後の北海道建設業界にも大きく影響していることを明らかにした。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 越 野 武
副 査 教 授 佐 藤 馨 一
副 査 教 授 越 澤 明
副 査 助 教 授 角 幸 博

学 位 論 文 題 名

日本期の南サハリンにおける建設活動に関する研究

日本近代建築史研究の進展のなかで、近年日本の海外植民地期の建築についてもいくつかの研究成果があげられてきているが、林業、水産業、鉱業を主軸に、日本、特に北海道と密接に関連する産業、経済システムを形成していた旧樺太 — サハリン島 — に関してはまったく手つかずの状態にあった。本論文はサハリン島北緯 50 度旧国境以南における日本統治期、つまり 1905 年（明治 38 年）から 1945 年（昭和 20 年）までの建設活動に関して、国内で得られる文献的資料と、限られた状況下ながら遂行された数度の現地調査をもとに、総体的に論じたものである。

論文の第 1 部から第 3 部までは、日本統治期を 3 期に分けて、それぞれに特徴的な建設活動と建設に関わった官の建築組織とその建築家、建築技術者、建設に携わった建設業者について解明している。

第 1 部統治最初期（1905～12）では、コルサコフ（大泊）およびユジノサハリンスク（豊原）における市街地計画とその建設をはじめとして、両都市間の鉄道建設、樺太守備隊、樺太民政署、樺太庁による官衙の建築などをとりあげた。主導的な建築家としては陸軍技師兼任の樺太庁技師田村鎮（1878～1942）の活躍と履歴を明らかにしている。初期官衙では木造の洋風建築が多く、ロシアの建築様式を用いず、明治後期の日本にも多く見られたスティック・スタイルを表現するのが特徴であった。この期に活躍した建設業者では、まず札幌の伊藤亀太郎（1863～1944）があげられるが、伊藤のもとから出て後樺太を代表する建設業者、実業家となる遠藤米七（1875～1935）の事績を明らかにしている。

第 2 部で扱う統治中期（1913～28）は大規模な拓殖活動が南サハリン全域に展開した時期であるが、その代表である製紙業をはじめとする諸産業施設や、鉄道敷設、港湾建設などをとりあげてそれらにかかわる建設活動を追究している。製紙業を南サハリンの基幹産業として位置付け、1914 年（大正 3 年）の三井紙料工場（王子製紙大泊工場）以下建設された豊原、落合、泊居、真岡、野田、恵須取、知取、敷香の製紙工場について、施設配置計画、建築的特色、社宅街の計画と社宅建築などを解明し、サハリンにおける最も初期の鉄筋コンクリート造建築が製紙工場で試みられたこと、恵須取など後期に建設された

工場では振興拠点都市の成立そのものに深くかかわったことなどを論じている。鉄道、港湾についても事業の概略とこれらにかかわる諸建築を明らかにし、さらにこの期の建設業者の動向にまで言及している。

第3部統治後期（1929～45）ではこの期に著しく拡充された樺太庁の建築組織とその活動を主として論じている。樺太庁建築組織の中核となったのは貝塚良雄（1900～74）以下の若手建築家、技術者で、1929年から31年にかけて豊原郵便局、樺太庁豊原医院、樺太庁中央試験所など、一連の大規模公共建築を建てているが、本論文ではこれらの計画と建設経緯と建築の内容を述べ、同時代の日本の建築動向に対応しつつ、クラシカルな表現からインターナショナル・モダニズム、さらにこれらに続く樺太庁博物館（1937）では伝統的な日本風デザインへと展開していった様相を論じている。

以上の時代的な展開に沿った論述に加えて、第4部では、公共建築と民間の商店や町並みについて、日本統治期を通じての特色を論じており、木造を主としながら過渡的な木骨鉄網コンクリート造が用いられ、本格的な鉄筋コンクリート造が工場建築を嚆矢として少数ながら大規模官公衙建築で実現していった過程を解明している。また樺太庁によって中小庁舎建築で標準設計が試みられる一方、これと対照的に町役場庁舎には個性的な秀作が認められることを指摘し、また民間の商店建築では北海道と同様の洋風町屋建築が流布していたことなどを論じている。さらに南サハリンの歴史的建築についての評価と保護施策に関しても、基本的な試論をおこなっている。

以上のように本論文は日本統治期南サハリンの建築をとりあげた初めての研究成果であり、新領域の開発という役割と意義を有し、しかも膨大な史資料を博搜しつつ対象とする建設活動の全貌を描くことによって、日本における近代建築史研究に新知見を加えたものであり、建築学の発展に寄与するところ大である。よって著者は北海道大学博士（工学）の学位を授与される資格あるものと認める。